

和紙

平安時代から 伝えられし、 上川崎の千年和紙。

上川崎和紙の歴史は約千年前にさかのぼる。平安の中頃、冷泉天皇(九六七〜九六九在位)の時代に始められたと伝えられている。平安時代に「みちのく紙」と称され、紫式部や清少納言たちに愛された「まゆみがみ」はここで漉かれた可能性が高いという。楮の皮を原料とする以前の和紙の材料は檀(まゆみ)であり、この檀で漉いた紙を檀紙(だんし)と呼んでいたのである。万葉の時代から安達太良山で採れる檀(まゆみ)で作られた弓は優れたものとして、多くの歌に

貴人たちに愛された

詠まれていた。
つまり「まゆみ」

上川崎の
みちのく紙。

たとえば安達太良山周辺の代名詞でもあった。檀の産地で漉かれた、みちのく生まれの「みちのく紙」とは、まさに上川崎和紙をおいて他にないと思われる。

江戸時代になると全国はもとより、福島県内各地でも和紙が生産されるようになる。上川崎和紙は主に二本松藩丹羽領内の「地障子」という障子紙の生産を二手に引き受けるようになった。楮を原料とする生漉き紙で、現在の和紙の原形といえる。この時代は、和紙も農産物や特産物と同じように年貢の対象であり、他の藩などに流出しないように「紙漉札」という鑑札制度の下で厳しい生産統制を受けていた。享和二年(一八〇二)に定められた「二本松藩享和

御条目」には「紙並に紙子、紙張御領内にて売買仕、他領へ指出す儀令禁止の事」とある。紙子は楮皮で作った和紙を加工した織物で羽織、寝具、袖無し、袴頭巾、刀袋、丸帯、煙草入れなどに利用されていた。紙張は紙で作った蚊帳のことで、大正から昭和二十年頃までは、農家の蚕室囲いとして障子戸の内側に釘で止めたり、吊したりして保温のためによくさん用いられていた。

江戸時代に花開く
日本の和紙文化。

